

一九三二、五、二〇

南滿洲及東部内蒙古ノ
清洲ニ於テイノ田露勢力範圍ニ關スル一參考資料

(草案)

陸軍省



(極秘)

外務省

は(7)

7.2
S 1.1.1.0 - 33

1904

0537

明治四十(一九〇七)年七月三十日
第一回露協約附屬密約追加約款

本協約第一條ニ掲ケタル北滿洲ノ分界線ハ左ノ如ク之ヲ定ム

露韓國境ノ北西端ニ始マリ琿春(Huichun)及必爾滕湖(Pirtang)北端
ヲ經テ秀水站(Hsiushuichan)ニ至ルマテ逐次直線ヲ劃シ、秀水站ヨ
リハ松花江(Sungari)ニ沿ヒ嫩江ノ河口ニ至リ之ヨリ嫩江
(Nunkiang)ノ水路ヲ溯リテ托羅河ノ河口ニ達シ此地點ヨリ托羅河ノ
水路ニ沿ヒ同河ト「グリニツチ」(Talaho)東經百二十二度トノ交叉點ニ至
ル、

は(7)

7.1
S 1.1.1.0 - 33

1905

0538

外務省

八月十四日 小村大使ヨリ英国外務大臣ニ通告
同日 栗野大使ヨリ佛國政務局長ニ通告

外務省

7.4 S 1.1.1.0 - 33 1906 0539

明治四十五（一九一二年）七月八日、第三回日露協約

第一條 前記分界線（一九〇七年七月三日附ノ日露協約ノ追加約款ニ

定メタル分界線）ハ托羅河ト「グリニツチ」東經百二十二度トノ交叉

Talaha

點ヨリ出テ「ウルンチュルン」河及「ムシシヤ」河ノ流ニ依リ「ム

OuloumTchoulin

Moushisha

シシヤ」河ト「ハルダイタイ」河トノ分水線ニ至リ、是ヨリ黒龍江

Kaladaitai

省ト内蒙古トノ境界線ニ依リ内外蒙古境界線ノ終端ニ達ス、

第二條

内蒙古ハ北京ノ經度（「グリニツチ」東經百十六度二十七分）ヲ以
テ之ヲ東西ノ二部ニ分割ス。

七月三日 在英加藤大使ヨリ英国外務大臣ニ内告

七月三日 在佛安達代理大使ヨリ佛國外務次官ニ内告

外務省

7.4 S 1.1.1.0 - 33 1907 0540

○大正四年日支交渉當時ニ於ケル「南滿洲及東部
内蒙古」ノ範圍ニ關スル解釋

「南滿洲

(一)日支交渉當時「南滿洲」ノ範圍ニ關シテハ我方内部ニ於テモ何等ノ決定ヲ爲シタル事實見當ラス從テ支那側ニ對シテモ右範圍ニ關スル我方見解等ヲ開示シタル事無シ

(二)支那側ノ解釋振ニ關シテハ加藤大臣ノ訓令(大正四〇〇支宛電報第一一七號及大正四〇〇同第二〇六號)ニ基キ大正四年四月三日第十八回談判ノ節駐支日置公使ヨリ支那側ニ問合セ見タル處之ニ對スル支那側ノ意見左ノ如シ(大正四〇〇支發大臣宛電報第一七五號)

は()

外務省

7.2

S 1.1.1.0 - 33

1908

0541

「支那政府ニ於テハ「南滿洲」ナル地名ヲ用ヒス、「南滿洲」ハ日本國ニ於テ普通用ヒラルル處ニシテ支那ハ之ニ對シ「東三省南部」ナル文字ヲ該當セシメ居レリ
又東三省南部、北部ト區別スルモ法制上何等一定ノ區劃無シ併シ東三省南部トハ大凡長春以南ト心得居レリ」

は()

外務省

7.2

S 1.1.1.0 - 33

1909

0542

ニ 東部内蒙古

(一) 我方解釋

大正四四二六第二十五回會議ニ於テ支那側ヨリ東部内蒙古ニ關スル我方見解ヲ求メタルヲ以テ、右回答振ニ關シ日置公使ヨリ請訓アリ（大正四四二六支發大臣宛電報第二一五號ノ三）之ニ對シ加藤大臣ヨリ日置公使宛回訓ヲ以テ（大正四四二七大臣發支宛第二七六號電報）

「南滿洲ト言フモ東部内蒙古ト言フモ共ニ素ト漠然タル地理的名稱ナルカ、我方ノ所謂東部内蒙古ハ長城以北ニシテ南滿洲ニ接壤セル地域ヲ指シ普通ニ所謂内蒙古東四盟ノ大部ヲ包括シ西方多倫諾爾邊迄ヲ含ム地方ヲ言フモノナリ」

外務省

0543

1910

S 1.1.1.0 - 33

113

0544

1911

S 1.1.1.0 - 33

(二) 支那側ノ見解

支那側ノ見解ヲ示スヘキモノニ次ノ資料アリ

(1) 前顯大正四年四月二十六日第二十五回會議ニ於テ支那側代表

(陸徵祥)ハ

「支那政府ニ於テハ南滿洲接壤地域ヲ以テ東部内蒙古ト看做

外務省

シ、北滿洲及直隸省ニ接近スル地域ハ之ヲ東部内蒙古ト見
做シ居ラサル旨」
ヲ述ヘタリ

(四)大正四年五月一日ノ談判ニ於テ我方最後修正案ニ對シ支那側
提示アリタル對案中ニハ我方ノ東部内蒙古ニ於テ商埠地ヲ開
設スルコトニ關スル要求ニ對スルモノトシテ
「支那政府ハ、、、速ニ自ラ南滿洲及熱河道所轄ノ東部内
蒙古ニ於ケル適當ノ地方ヲ商埠地トナスコトヲ承諾ス」
ノ一項アリ(大正四、五、二、支發大臣宛電報第二三〇號)
右ハ支那側ニ於テ「日本國ノ要求セル東蒙地域ハ會テ交付ヲ
受ケタル日本修正案中ノ豫定商埠所在地(後記註參照)ヲ包

外務省

7.4 S 1.1.1.0 - 33 1912 0545

含スレハ足ルモノト了解シ支那對案ニハ南滿洲及熱河道所轄
ノ地方トナセル次第」ナル趣ニテ即東部内蒙古ヲ以テ南滿洲
ニ在ル内蒙古及熱河道所轄ノ地ナリトスル支那側見解ヲ表示
スルモノナリ、但東蒙地域ヲ以テ日本提示ノ豫定商埠所在地
ヲ含メハ足ルモノト解スルコトニ對シテハ日置大使ヨリ其ノ
誤解ナル旨篤ト説明ヲ與ヘ置キタル趣ナリ
(大正四、五、二、支發大臣宛電報第三一五號參照)

註。

大正四年三月十六日第十一回談判並同二十五日第十四回談判
ノ際我方ヨリ開放候補地トシテ提案シタル都市名左ノ如シ(一
同年支發大臣宛電報第一三四及一五七號)

外務省

7.4 S 1.1.1.0 - 33 1913 0546

錦州（錦縣）醴泉（突泉縣）小庫倫（綏東縣）熱河（承德縣）開魯縣 林西 四平街 開原 柞鹿（西豐縣）大疙疸（西安縣）北山城子（山城子）撫順 本溪湖 興京 懷仁（桓仁縣）大孤山 伊通州 農安 額穆索（額穆縣）敦化 盤石（磨盤山）安圖 大賚 朝陽

而シテ當時我方ニ於テハ右二十七ヶ所中東部内蒙古ニ屬スルモノハ

熱河、醴泉、開魯、小庫倫、林西、大賚、朝陽、農安ノ八ヶ所ナリトノ見解ヲ有シ居タル趣ナリ、但此ノ見解ハ支那側ニ開示セラレタルコトナシ、

外務省

117

7.4 S 1.1.1.0 - 33 1914 0547

（大正四四一四）大臣發在支公使宛公信政、機密送第六六號參照）

（大正四年五月十三日（支那ハ五月八日附我方最後通牒ヲ受諾セリ）支那政府公表ノ日支交渉頓末書ニ左記要旨ノ一節アリ（原文英文別紙）

「支那政府ハ亦東部内蒙古ニ關スル四條項ノ中三條項ヲ受諾スヘキ旨申入レタリ、東部内蒙古ノ境界如何ヲ決定スルニ付多少ノ困難アリタルモ、蓋シ右ハ支那ノ地理的名稱トシテハ新規ノ言葉ナレハナリ」支那政府ハ日本政府ニ於テハ支那行政權ノ下ニアル地方ヲ意味スル旨日本公使力會議ニ於テ爲セル所言ニ基キ、又日本公使提出ノ表ニ擧ケラレタ

外務省

7.4 S 1.1.1.0 - 33 1915 0548

ル開埠豫定地ヲ參酌シ、所謂東部內蒙古トハ內蒙古中南滿洲ノ權下ニ在ル地域及熱河道所轄ノ區域ナル旨推斷シ、從テ此ノ語ノ定義ニ對シ何等ノ制限ヲ附スルコトヲ避ケタリ。即右ハ前顯(四)ノ支那側見解ヲ繰返シ居ルモノナリ。但「日本公使カ會議ニ於テ爲セル所言」トハ如何ナル所言ヲ指セルモノナルヤニ關シ加藤大臣ヨリ日置公使ニ對シ照會シタルニ對シ(大正四、五ニ)大臣發支宛第三七四號電報)同公使ヨリ *Miles Asia* 左記ノ如キ回答アリ。

「會議中支那側ニ於テ東蒙ハ民智未タ開ケス、交通モ不便ニテ外人ニ對スル保護モ行届キ兼ヌトノ理由ノ下ニ絶對的ニ我方ノ要求ヲ拒ミ商議ニスラ應シ難シト主張シタルニ付

外務省

7.4 6 1.1.1.0 - 33 1916 0549

本使ハ民智未開ト交通不便トニハ何等關係無キ鐵道借款租稅等ノ如キ事項ニ對シテハ之ヲ承諾シ難キ理由ハアラサルヘク、將又支那行政ハ行ハレ居ル地方ニ於テハ南滿同様ノ取極ヲナスコトモ毫モ支障無之キ筈ナリト駁シ概括的ニ支那側ノ東蒙不商議ノ主張ヲ否定シタルコトアルモ、我要求區域制限等ニ付何等言明致シタルコト無シ」云々(大正四、五ニ)支發大臣宛電報第三一五號)

又「日本公使提出ノ表、、ヲ參酌シ」云々ノ支那側所見ニ對シ日置公使ニ於テ嘗テ反駁ヲ加ヘ置キタル次第ハ前顯(四)ノ通ナリ

外務省

7.4 6 1.1.1.0 - 33 1917 0550

別紙

The Chinese Government also proposed to agree to three of the four articles relating to Eastern Inner Mongolia. There was some difficulty in determining a definition of the boundaries of Eastern Inner Mongolia - this being a new expression in Chinese geographical terminology - but the Chinese Government, acting upon a statement made at a previous conference by the Japanese Minister that the Japanese Government meant the region under Chinese administrative jurisdiction, and taking note, in the list presented by the Japanese Minister, of the names of places in Eastern Inner Mongolia to be opened to trade, inferred that the so-called Eastern Inner Mongolia is that part of Inner Mongolia which is under the jurisdiction of South Manchuria and the Jehol circuit; and refrained from placing any limitation upon the definition of this term.

S 1.1.1.0 - 33 1918

0551

REEL No. A-0177

0305

アジア歴史資料センター

分類 1.1.0.21-12-2

電信費支辨

電送第 10564 號

和 電 信 案	件 件 件	宛 宛	暗 第 二 八 二 號	主 任 三 浦 亞 局 分 室	主 任 三 浦 亞 局 分 室	管 理 三 浦 亞 局 分 室
					發 名 込 綴	發 名 込 綴
外 務 省	電報 八(十)三付右三即念了る心	三(四)二間名物方思付ノ諸表 二十三回	貴電第七八二號 南洋各東部内常務	至急	在幸名	謝書 三間スル件

電信課長 36

電信案

(起草) 昭和七年 月 日

(原議用紙甲) 圓納

S 1.1.1.0 - 33 1919

0552



0553

1.1.1.0 - 33

1920

聯合 外信 第二號 七年五月廿一日

◎ 勞農政府調査團の要請拒否

モスクワ廿日發聯合 聯盟調査團は馬占山と

の會見に就き滿洲國政府よりの強硬なる抗議

を受け、結局右會見を断念して奉天に引揚げ

ることとなつたがこれに先立ち、勞農政府に

對し馬占山との會見の爲め勞農領土通過の許

可を要請しその拒否に會つたことが廿日勞農

政府よりの公表に依つて判明するに至つた、

勞農政府の公表内容左の如し

「哈爾濱に在る聯盟調査團は哈爾濱監督勞農

總領事スラヴツキ1を通じて、調査團の一班

がアモグエスチエンスク經由サハリ アソ

續く

0554

1.1.1.0 - 33

1921

外信 第二號ノ二

に赴き馬占山將軍と會見する許可を與へん

ことを勞農政府に要請した

右要請に對し勞農政府はスラヴツキ1に對

し物議政府は對し彭唐の內政に對し、不平

の態度を遵守することを知悉するを以つて

委員の彭唐前を拒否するの他なき旨回答

すべきことを敬告した」

前 八。五五 ナ